

一

次の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 意見を異にする。
- ② 一念発起してがんばる。
- ③ 彼の言葉はなかなか含蓄がある。
- ④ 商店街は雑踏を極めている。
- ⑤ 物陰に潜む。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 客をシヨウタイする。
- ② 賞状をサズける。
- ③ 合格をシュクガする行事。
- ④ 無断で休むとはいいいドキョウだ。
- ⑤ カンシンを買うために媚をうる。

三

次の1～5について、指示通りにア～オの語句を並べ替えたとき、四番目にくるものを記号で答えなさい。

1 国語辞典の配列順に

ア 手綱 イ 卓球 ウ 定期 エ 治水 オ 茶飯事

2 作品の成立した年代の古い順に

ア『源氏物語』 イ『新古今和歌集』 ウ『坊っちゃん』 エ『奥の細道』 オ『万葉集』

3 暦の順に

ア 端午の節句 イ 重陽の節句 ウ 桃の節句 エ 正月 オ 七夕

4 年齢の若い順に

ア 還暦 イ 古稀 ウ 志学 エ 米寿 オ 不惑

5 画数の少ない順に

ア 葉 イ 帯 ウ 疑 エ 協 オ 衣

四

次の文章は岡本太郎『今日の芸術』の一部です。これを読んで、後の問に答えなさい。
※なお、字数指定のある問題については、すべて句読点・カッコ・記号も一字として数えます。

問一 A B C D にあてはまる語を次の中から選びなさい。

ア というのは イ ところが ウ よかれあしかれ エ そのためには

問二 ~~~~~線部 甲・乙の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

甲 うけあい

ア 心外であること。

イ 失態であること。

ウ 保証されること。

エ 承諾されること。

オ 却下されること。

乙 磊落らいらく

ア 礼儀を欠いているさま。

イ 細かなことにこだわらないさま。

ウ 不真面目なさま。

エ もの怖じしないさま。

オ 振る舞いが荒々しいさま。

問三 —線部①「はばをきかせている」とほぼ同じ意味として筆者が用いている言葉を、▼より後から九字で抜き出しなさい。

問四 —線部②「これを聞いて笑ってしまいました」とあるが、なぜか。その理由を次の中から選びなさい。

ア Kという画家の姿勢が芸術家としてあるまじきものだったから。

イ フランスの画集が絵画の制作の参考になるとは思われないから。

ウ 画家どうして画集を貸し借りしあっている状況があまりに滑稽だったから。

エ 画家にとって大家の画集がいかに大切なものか理解していなかったから。

オ 芸術家が他人の作品を気にかけることなど言語道断であるから。

問五 —線部③「芸ごと精神」とあるが、これが具体的に述べられている箇所を、これより後の本文から二十八字で抜き出しなさい。

問六 — 線部④「おのれを貫きとおしたい」とあるが、「おのれを貫きとおす」とはどのようなことですか。」すること」という形に合うように、これより後の文章から十一字で抜き出さない。

問七 — 線部⑤「ギリギリまで固定した型」を言い換えるのにふさわしい言葉を、これより前の文中から七字で探し、答えなさい。

問八 — 線部⑥「かえって正道」とあるが、その理由はなぜか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 名作とされる作品がそうであったように、芸術はいつの時代でも認められないものだから。
- イ 邪道と評価されたものでも、時代の変遷によっていつか正道と評価されることもあるから。
- ウ 芸ごとにとって邪道なことはすべて、芸術の場合においては正道と見なされるから。
- エ 既存の方法から外れることが邪道ならば、それこそが芸術の本質になっているから。
- オ 発表当時は不当な評価をされることによって、芸術は進歩していくものであるから。

問九 本文の内容を述べたものとしてふさわしいものを、次から二つ選びなさい。

- ア 芸は芸術よりもさまざまな点で劣っているもので、今後も到底くらべようのないものである。
- イ 芸ごとの多くには作法の細部にいたるまで規定があり、多くの流派がはびこっている。
- ウ 芸術の世界がかたくなに守ってきた封建制度は、今も日本画の世界に顕著に影響を及ぼしている。
- エ 芸術と芸ごとはその本質を全く異にするものであるが、どちらも互いの発展のために必要な存在である。
- オ 芸ごとの世界では過去の達人の模倣に主眼が置かれており、ここから新たな価値観が生まれてくることはなかった。
- カ 芸術作品を的確に批評するためには、創造的な部分を見いだす力が求められる。

五

次の文章は宮本百合子『杏の若葉』の全文です。これを読んで、後の問に答えなさい。

※なお、字数指定のある問題については、すべて句読点・カッコ・記号も一字として数えます。

「おや、時計がとまっているでないか」

母親の声に、ぬいは頭をあげ、古い柱時計を見上げた。

「ほんによ」

「いつツから動かねえかつたんだか——しようないな、ぬい、若くせにさ、おまえ」^①

「だって母さん、耳についてちまつているからわかんなかったのさ。ほら——聴いておみ、（1）言ってるようだろ？」

杏の若葉越しに、薄暗い土間にまで日のさし込む静かな午後であった。

「早く巻きな」

ぬいは煤けた大踏み台を持ち出して、（2）と古風な柱時計を巻いた。踏み台を降りようとすると、いつの間にかぼんやりした金色の振り子が、西洋花を描いた硝子びんの奥で止まってしまっている。ぬいは、また上ってねじをかけようとしたがぜんまいはいっぱいだと見え、かたくて廻らなかつた。振り子を指で突くとしばらくの間、コチコチコチ機械が動くが、それは一分も保たず、すぐ止まってしまふ。

ぬいは、踏み台に立つたまま、胡桃割りをしている母親に声をかけた。

「この時計——どうかなつちやつた」

「なして」

「動かないもの——ちゃんと——^②ばけたのね」

のんきに、尖の折れた帳綴じで胡桃の実をほじくっていた母親は、むきに、

「そんなことあるもんでない」

と立ち上がった。

「どれ、もう、こりや二十年もこわれずにここに掛かっていた時計だもん、そういきなり駄目になるこつてないわな。どれ、降り、私がやってみる」^③

母親は、小学校というものもなかつた時分に育った婆さんだから、高等小学を出たぬいより、機械なんかいじるのはもつと下手であった。ただ力はあるから、りきんで、ねじを逆に廻そうとする。

「ああ駄目だわ、母さん、ぜんまいが切れたら大変だよ」

「何としていいか。これは困つたな——ああ、ぬい、一走り清ちゃんとこさ行つてご。きつといるから。あの子なら、わけはあ
るまい、ついこないだ、小形屋の蓄音機をすつくりほごしてまた鳴るようにしたつてもの」^④

ぬいは、（A）紺の前掛をはずして、野道を、半町ばかり北よりの清二の家まで迎に行つた。清二は戸口でわら打ちをしていた。ぬいを認めると、彼はわらを打ちながら、頭を動かして笑い、

「ウウウウウ」

と挨拶した。ぬいは、まるで困つた気持ちでお辞儀をしながらあかくなつた。ぬいは、口の利ける者とはかりつき合うのに馴れているので、清二のように評判の利口者で、あんなに髪を分けた立派な成人の男で、しかも唾の人に、どんなふうにしていいのかわからないのであった。

清二のおふくろが、（3）指で手真似をしながら、ぬいの用向きを伝えた。清二は、眼で、この子の家か？と訊きながらぬいを指さした。ぬいは力を入れて頷いた。清二は、ほつぺたの痩せた笑顔で手つきをした。

「もうすぐこの仕事が終わるから、そしたら行きますとよ」

「じゃあ、どうぞ」

ぬいは、（4）杉垣をかけ出し、野道ではゆつくり歩きながら清二と一緒に来なくてよかったと思つた。ぬいは、彼がこの春、^⑤

草履屋から逃げて来たときの話を聞いた時から、しんでは深く彼に同情していた。清二は、草履屋の主人が人並みの賃金を自分だけに決して払ってくれない上、何か悪い病気持ちの朋輩と一つ床に寝なければならぬのがいやでとうとう帰って来たのに、口が利けないからよくその気持ちが通らず、ただの我儘と思われ二度も親爺に引っぱられてもとの店に戻された。三度目に、彼が涙をこぼして頼んだのでやっと家にいいことになった。ぬいは、口が利けないだけで彼はどんなに苦勞しているのかと思うと、会った時、一度はちよいと、

「ほんとうにお気の毒だと思つてよ」

と言わずには気のすまない心持ちがした。唾は耳がきこえないから、ぬいが知っているただ一つの方法——言葉で喋ること——では、ただ一つの告げたいことさえ告げることができない。

いろいろそういう気持ちなのに、半町のところでも黙りこくつて清二と家まで歩いて来なければならなかったら、どんなにぐあわるかつただろう。

十五分ばかり経つと、清二が、太い羽二重の兵児帯をしめてやつて来た。

「ア、ウ、ウ」

彼は、炉の横に座つて挨拶した。

母親は、やはりわからないくらいにだが当惑したふうで、普通の人に言うように、

「ええお天気でございます」

と言いながら、茶を注いで出した。清二は、それを飲むと、すぐ下ろしてねかしてある柱時計を指さした。母親はいそいで合点した。清二は、節の高い指で裏ぶたをあけ、複雑な機械のあちらこちらを試していたが、ぬいと母親と二人の方を見ながら、何かを掌にあけ、頭でこするよつなことをした。

「アウ、アアア」

そして、ぜんまいにまた何かあけるようにする。

「何だろ、清ちゃん何があるのかね」

「——母さん！ 油、髪のお油だわ」

ぬいは、小さい椿油のびんを出して来た。清二は、そのびんを見ると、嬉しそうに（5）をして手を出した。がすぐまた別ものを探した。ぬいは、一生懸命になつて、彼のいるものが、紙切れなのを当てた。清二は機械のところどころに少しずつ油をさして、やつと時計が動くようにした。

「ああ、これでいい！ ありがとうございます。まあ一服しておくれ」

再び、古風な柱時計がくすぶつた天井の下で、活発にチクタクいいだした。ぬいは、溜息をついた。彼女は、母親が、たくさん何か礼して、清二の労をねぎらつてやつてくれればよいと思つてじつと待っていた。が、母親は、柱にかかった時計を度々見て満足を示すだけで、ひどく三人は手持ち無沙汰だ。彼女が、思いきつて炉の火箸をとりあげようとしたときであつた。外を見たり煙草をすつたりしていた清二が、ふと、手を延ばして片方火箸をとった。彼は、

「ア」と、ぬいに合図し、灰の上に書き始めた。

「アシタ、町デ、ホントノ、キカイ油ヲ、買ウ」

母親は、「ほう、そうかい」

と、金を出しに立った。ぬいは、ちよつと考えていたが、友達の背中に字を書いて読ませるときのように、熱心に、一字書いてはわかつたかどうかをためしながら、次の文句を灰に書いた。

「清サンハ、ホントニ、キカイノコトガ、オ上手デス」

※本文中に現在では差別語に相当するものがありますが、作品の書かれた時代性・作者が故人であることなどを考慮して、そのまましました。

問一 (1) から (5) に適当な言葉を、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア ギギギギ イ ちよいちよい ウ うんうん エ カチカチ オ ぱたぱた

問二 (A) に最も適当な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 上の空の状態で、
イ ふてくされるようにして、
ウ 気がすまないながら、
エ どきどき胸をはずませて、
オ 怖いもの見たさに、

問三 — 線部①「若えくせにさ、おまえ」の後に続く言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 時計がとまったのに、気づかなかったのかい
イ 時計がとまったのに、平気だったのかい
ウ 時計がとまったのに、心配でなかったのかい
エ 時計がとまったのに、教えてくれなかったのかい
オ 時計がとまったのに、ほおっておいたのかい

問四 — 線部②「ほけた」とほぼ同じ意味で使っている言葉をこれより後から、五字で探して答えなさい。

問五 — 線部③「ここ」とはどこか、文中の言葉(九字)を抜き出して記しなさい。

問六 — 線部④「清ちゃんとこさ行ってこ。きつというから」について。母親は清二の身に何かがあったから「きつという」と判断している。清二が家にいるきつかけとなった出来事を、文中より十字で「〜こと」に続くよう、抜き出して答えなさい。

問七 — 線部⑤「清二と一緒に来なくてよかったと思った」理由を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 この小説の題名についての説明として最も適当なものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 小説の世界観を表現しているとともに、主人公清二の不遇さや違和感を暗示している。
- イ 小説の歴史性を表現しているとともに、主人公ぬいの未熟さや絶望感を暗示している。
- ウ 小説の特殊性を表現しているとともに、主人公ぬいの初々しさや開放感を暗示している。
- エ 小説の季節感を表現しているとともに、主人公ぬいの若さや可能性を暗示している。
- オ 小説の地方性を表現しているとともに、主人公清二の暗さや罪悪感を暗示している。

問九 ぬいの清二に対する心情の変化を説明したものととして適当なものを次から選び、記号で答えなさい。答は一つとは限らない。

- ア 最初は、清二が障がい者であることに対して同情を抱いていたが、彼が見事に時計を修理するのを目の当たりにして、今度は尊敬の念を持つようになった。
- イ 最初は、清二が障がい者であることを気の毒に思っていたが、清二の活躍ぶりを見て、全く問題はないと考えるようになった。
- ウ 最初は、清二が利口者だという評判に対して懐疑的だったが、彼が見事に時計を修理するのを目の当たりにして、彼の能力を認めざるを得なくなった。
- エ 最初は、清二とのコミュニケーションがうまくとれないことにいらだちを覚えていたが、時計の修理をする内、徐々にコミュニケーションがとれるようになり、いらだちはおさまった。
- オ 最初は、清二とコミュニケーションがうまくとれないことに不安を感じていたが、時計の修理を手伝う内、徐々にコミュニケーションがとれるようになり、不安は解消されていった。
- カ 最初は、清二とどんなふうに接すればいいのかとまどいがあったが、時計の修理を通じて、彼に対して家族のような連帯感をもつようになった。
- キ 最初は、清二が喋れないことから、彼と距離をとりたいと思っていたが、時計の修理を手伝う間、いよいよコミュニケーションがとれないことを実感し、失望した。
- ク 最初は、清二とコミュニケーションをとることを億劫に思っていたが、時計の修理を手伝う内に、だんだん楽しくなり、本格的に手話を習おうと考えるまでになった。